

「好意的な対応」と「自立」への志向
- 協働するデンマーク＝グリーンランド -

デンマークの自治領グリーンランド島は、1721 年以降 200 年強に渡る「デンマークの植民地」を経て、1953 年にデンマークの一地方と同格の地位を獲得した。1979 年には、政治的には「デンマーク国家 (Rigsfællesskabet)」という制度的枠組みを構成するデンマークの自治領となり (内政の権限を獲得)、地方政府から自治政府への転換を果たした。自治権獲得以降のグリーンランドは、一方でデンマークから莫大な経済援助 (2005 年の例では、グリーンランド国民総生産の約 4 割がデンマークからの経済援助) を受けつつ、他方でデンマーク政府管轄であったいくつかの責任分野 (例えば、保険制度、住環境、職業関係など) の行政権を獲得したことで、自身の「自立性」を相対的に高めている。2003 年には、自治権を行使しデンマークとの交渉を経て、自治法には明記されていない外交・安全保障領域への発言権を獲得したが、これによりグリーンランドは、一自治領として「デンマーク国家」に留まりつつも極めて広範な権限を有する存在となった。自治権獲得以降のグリーンランドからは、デンマークの影響力を極力排除し、自身の「自立性」を高める傾向が見られているが、この流れの中で 2008 年 11 月 25 日には、グリーンランドにおいて「自立 (Selvstyre)」(自治の拡張) の是非を問う住民投票が行われている。大方の予想に反せずグリーンランドの「自立」を望む声が慎重論をおさえ、グリーンランド住民のマジョリティはデンマーク/「デンマーク国家」からの「自立」を選択した (投票率 72%: 賛成 75.5%、反対 23.5%、無効 1%)。投票率 72%は、グリーンランドが自治を選択した 1979 年 1 月の住民投票における投票率 63%を上回るものであった。

今回の報告では、グリーンランド-デンマーク間の政治的関係を分析していく上で、近年のグリーンランドにおいて顕著に見られる「自立」志向に着目して議論を展開したが、ここでは簡単に「自立」志向に着目する理由を二点あげておきたい。

まず一点目は、既述した外交・安全保障領域への発言権付与に代表される権利委譲過程には、グリーンランドの意向を汲みある種「好意的」に権限を付与しようというデンマーク側の姿勢が見られる、ということである。二点目は、より大きな視点として、島をめぐる「自治/自立」研究への貢献である。従来の国際政治学的手法を用いた島の「自治/自立」をめぐる先行研究では、「中心」との関わりの中で「周辺/周縁」に追いやられた島がどのように自身の「自治」を達成していくのか (それは、往々にして経済的自立の観点からの指摘や地方分権の文脈とのかかわりから指摘されることが多い)、あるいは「中心-周辺」軸を排除して内発的發展に依拠する「自治」を模索するといった立場を採ることが多く、グリーンランド-デンマーク間に見られるような「中心」からの「好意的」なアプローチによる「中心」軸と「周辺」軸の相対化を基軸として位置付ける「中心-周辺」関係、あるいは「中心」によって修正される「中心-周辺」関係の捉え方はほとんど見られない。無論、ここで「中心-周辺」関係に内包する「中心」と「周辺」間の (強制的/間接的及び関係的/構造的) 影響力の非対称性を否定するつもりはない。しかし、少なくとも政策

レベルにおいては、その非対称性が「中心」の積極的なアプローチによって修正され、「周辺」を高度に自立化させている。この点において、「中心 - 周辺」の構図に必ずしも当てはまらない事例を既存の政治的「中心 - 周辺」論に対置させつつ、どのように扱っていくのかという点に目を向けなければならない。

今回の報告では、一般化の極めて困難なテーマであることを承知した上で、論旨を明確にしておくためにもグリーンランドの「自立」志向と「他の西欧諸地域における地域主義運動」について類型的な説明を行った。この点を明らかにしていく上で、本報告では本土（中心）との政治的「中心 - 周辺」関係における島側の内的ロジックとしての「自治主義的」選択と「分離独立主義的」選択に着眼した。それは、デンマークの「好意的な対応」とグリーンランドの「自立」志向との相互依存構造がどのような構成要素によって成り立ち、結び付き、そしてそれらが変化して今日状況を作っているのかという点を実証的に解明していくことに繋がっていくと考えたからである。無論、二つに大別した選択を扱うだけでは、周辺における「中心 - 周辺」関係を理解したとはいえない。また、政治的中心と経済的中心が一致しないケースも少なくなく、政治的・経済的領域を一括りに地域主義運動と呼ぶことはできない。さらに、政治・行政面における本土社会の対周辺政策の性格は一様ではないので、それらを見ずして本土（中心）と周辺の間を論じることはできないだろう。しかし、これらの点を考慮に入れてもなお、グリーンランド - デンマーク関係は「中心（本土）」と「周辺（島）」の双方向から、上記の選択にはおさまらない特異な傾向が生み出されているという意味において、極めて興味深い事例である。すなわち、グリーンランドの「自立」は、デンマークの「好意的な対応」に支えられながら、あくまでデンマーク国家に属しつつ広範な権限を有する政治上のアクターになったことを意味している。この点に見られるデンマークのグリーンランドに対する「好意的な対応」は、EUやアメリカとの関係においても顕著に確認される。

このような、デンマークのグリーンランドに対する「好意的な対応」は、北欧型民主主義という枠組みの中で語られることが多い。ここでいう「北欧型民主主義」というのは、デンマーク／「デンマーク国家」に包摂されたグリーンランドという「下位文化」が、中心としての本土デンマークによって法制度・実質両面において「尊重」されている現実を指している。そもそも学問上「北欧型民主主義」と呼ばれる「主義」は、合意による諸デモクラシー（consensual democracies）という特徴を内包し、妥協を経た合意に基づく協調によって政治が採り行われているとされる。とはいえ、この見方は、あくまで北欧諸国の政治に対する「共通イメージ」であり、「北欧型」として北欧諸国における政治とデンマーク政治とを一括りに捉えることは、素朴にすぎよう。しかし、ここでは「北欧型民主主義」それ自体の用語を批判したり検討したりするというよりも、むしろデンマークのグリーンランドに対する対応をひとまず「北欧型民主主義」という言説を援用しながら整理し直し、「北欧型」の「民主主義」といった言説に覆い隠されるデンマークのグリーンランドに対する（カッコ付きの）「好意的な対応」（より厳密には「好意」の両義性）を顕現させることを目的としている。このような「北欧型」というモデルを議論の基軸として設定することは、デンマーク政治（あるいは、それを規定する政治文化）の一つの特徴である「寛容さ」やリバタリアン的な志向を有しつつも「平等性」を重んじる、「デンマーク・モデル」への理解に結び付く。実際にデンマークでは、国家会議（Rigsmøde）という形でグリーンランド・フェロー諸島との協議の場が設けられており、デンマーク政府は、原則的にグリ

ーンランド・フェロー諸島との協議による結論を「デンマーク国家」全体のコンセンサスとして採用している。少なくともこのような政治文化とそれに伴う制度設計は、デンマークの「好意的な対応」を体現しているし、「北欧型民主主義」が理想化される一つの要因ともなっているといえるのである。

いずれにせよ、本報告及び研究は、グリーンランドの「自立」志向を基軸としながら、デンマークの「好意的な対応」と向き合っていくことを一義的な目的としている。この研究を遂行していく上で予想される成果としては、一先ず三点あげられるだろう。

一点目は、何よりもまず現地語（デンマーク語）で書かれた政府文書、プレスリリース、報告書などの一次資料やデンマーク及びグリーンランドでのインタビュー調査を用いて、世界的な次元においてもこれまで言語障壁の高さ等の理由によりほとんど研究されてこなかった領域（グリーンランド-デンマーク）を基軸とした北欧地域研究／北大西洋地域研究に新たな視点を加えることができる点である。二点目は、「北欧型」と称されるデンマークの「好意的」な対応（「中心-周辺」関係を「中心」自らが修正しようとする対応）の内的ロジックが明らかにされる点である。これは、デンマークが積極的に行う外国人政策や途上国・地域への開発援助等の「人道支援」の一端を明らかにすることにも繋がっていく可能性を秘めている。三つ目は、「デンマーク国家」の融解は、近年のグローバル化に伴うデンマーク（主権＝国民国家）の「主権性」「領域性」の相対的低下という現象によって説明されうるのと同時に、あるいはそれ以上にデンマーク自身のグリーンランドに対する積極的な権利委譲によって引き起こされている点が明らかにされることである。このような島を鍵としながら国際政治を見ていくことは、権威の分散（dis-aggregation）や新しい集合性（collectivities）の創出など多重的空間編成が指摘される時代に合致しているともいえるだろう。結果として、「周辺」に対する「中心」からの積極的なアプローチに着眼しつつ「中心-周辺」関係の内的ロジックを暴こうとする本報告及び研究の試みは、「北欧型民主主義」を表現する場としてグリーンランドが扱われていることと「デンマーク国家」に属しながら自身の「自治」の度合を高めるグリーンランドの「選択」を体現するものとしての「自立」言説との相互依存構造がどのような構成要素によって成り立ち、結び付き、そしてそれらが変化して今日的状況を形作っているのかという点を実証的に解明していくことに繋がっていくのである。

報告後は、指定討論者であった前田洋平君及び松枝世君の両氏からの的確な指摘を頂いた。また、フロアの方々からも多くの質問を頂いた。要約的に記せば、以下の四点に絞られる。

1. デンマークの「好意的な対応」それ自体について - 改めて、デンマークはなぜ「好意的」であるのか／そのパワー・リソースについて
2. 枠組みとして設定した「中心-周辺」関係にグリーンランドの事例が与える影響
3. 「北欧型民主主義」の構成要素について
4. 論文の構成

指摘して頂いた点をふまえて、これからも研究に精進していきたい。ありがとうございました。